

## 調 査 研 究 報 告 書

事業主体名	一橋大学社会学部小林ゼミナール	電話	
代表者職氏名	大学院社会学研究科特任教授 小林 多寿子	ファクシミリ	
調査研究名	相馬野馬追にみるレジリエンスと今後の発展可能性を考えるフィールドワーク		

## 1 調査研究の実施概要

実施内容	<p>南相馬市の課題解決のために、以下の調査研究を実施しました。</p> <p>相馬野馬追をめぐる現状を理解し、実態を把握することを目的として、つぎの三つの調査を中心に取り組みました。</p> <p>(1) 相馬野馬追の歴史的変遷、東日本大震災被災および原発事故被害状況とその前後の相馬野馬追の実施状況をめぐる調査  (2) 南相馬における祭礼の文化的社会的背景に関する地域調査  (3) 相馬野馬追関係者への訪問インタビュー調査</p> <p>実際には、南相馬市訪問調査活動は、コロナ禍の影響を大きく被りました。とりわけ2021年1月から3月まで一都三県で緊急事態宣言が再度発令されたことを受け、冬季調査活動は時期を遅らせ、訪問者数の削減や滞在時間の短縮等をはかり、大学では万全のコロナ対策をとることで出張が許され実施しました。南相馬市関係者にはオンライン・インタビューへご協力いただき、調査への温かい支援を受けました。</p> <p>研究期間中、南相馬市訪問調査は、4期に分けて実施することが可能となりました。限られた機会を活かすために、相馬野馬追関係者へのインタビュー調査に力点をおくことにし、以下のとおり、おこないました。</p> <p><b>【訪問インタビュー調査】</b>  2020年 8月調査 南相馬市観光交流課担当者・南相馬市博物館館長  五郷騎馬会会長  10月調査 秋季競馬大会参与観察  11月調査 相馬野馬追執行委員会、南相馬市博物館学芸員  北郷騎馬会会長、小高郷騎馬会侍大将  2021年 3月調査 北郷騎馬会関係者  小高郷騎馬会会長および小高郷騎馬会関係者  NPO 法人相馬救援隊</p> <p><b>【オンライン・インタビュー調査】</b>  2021年3月 南相馬市観光交流課野馬追担当者  南相馬市コミュニティ推進課市民活動支援係</p> <p>訪問インタビュー調査ならびにオンライン・インタビュー調査に加えて、東日本大震災・原発事故関連および伝統的祭礼関連の文献調査をおこないました。南相馬の歴史的経緯と文化的社会的背景の理解を深めることで、南相馬の地域的特性に基づいた相馬野馬追の考察と地域課題の解決を検討しました。</p>		
調査研究費	総事業費		382,471 円
	うち補助対象経費		376,030 円
	補助金額		300,000 円
調査研究期間	2020 年 8 月 1 日 ～ 2021 年 3 月 31 日		

## 2 事業実施の成果

<p>南相馬市の課題</p>	<p>調査研究により、</p> <p>相馬野馬追という長い歴史をもつ伝統的祭礼が直面する課題が浮き彫りになりました。これまで幾度となく存続の危機に晒され、それを乗り越えてきた相馬野馬追は、レジリエンスつまり困難を乗り越える力を包含していました。しかし、いま再びコロナ禍のなかで直面する困難に対処し、地域で培ってきたレジリエンスを発揮して、今後の発展可能性へつなげていくことができるのか、野馬追は問われています。</p> <p>そこで、相馬野馬追に関わる関係者へのインタビューを中心とするフィールドワークをおこなってあきらかになった直面する課題を具体的に次の四点にまとめました。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 野馬追における出場騎馬数の減少と後継者問題</li> <li>2. 野馬追各組織間および組織内におけるコミュニケーション問題</li> <li>3. 財政問題</li> <li>4. 地域住民の意識の問題</li> </ol> <p>1. 東日本大震災と原発事故の苦難を乗り越え、野馬追は従来の開催状況を取り戻そうとする過程にあったもののこのたびのコロナ禍による影響がおおいに懸念されます。後継者育成は、かねて野馬追が直面する課題でありましたが、とくに若い世代が騎馬武者として出場するにあたって複数の要因が重なりハードルが高いことがあきらかになりました。</p> <p>2. 野馬追に携わる人びとの間における祭礼の継承・発展のための議論の場が不足していると感じられました。野馬追に関わる、野馬追執行委員会、各騎馬会、三神社、野馬追保存会という四つの組織は、野馬追の成功のために協力しあっていますが、運営、参加、神事の実施、伝統保存と果たすべき役割がそれぞれ異なっています。そもそも野馬追には、「地域の安寧と繁栄」を願う神事、平将門由来の武士の祭り、地域における最大の観光資源、地域住民のネットワークの場など、多様かつ複雑な側面があり、これらをまとめることは大変難しいにちがいありません。しかし、参加者減少問題に対する後継者育成や新規参加者の獲得の問題を解決するためには、各騎馬会が各々で対処することを越えて全体での議論の場を築くことが課題であるとおもいました。</p> <p>3. 野馬追には例年約 5 千万円もの予算が必要で、企業からの協賛金が 22%、入場料が 24%を占めると伺い、コロナ禍による開催への影響を考えると、野馬追を安定的に開催するためにも財政問題は大きな課題であるとおもいます。</p> <p>4. 相馬野馬追の地元において、野馬追に関わる人と関わらない人の意識の乖離が進んでいるという地域課題を感じました。馬の祭礼の地元において地域住民が馬と触れあう機会が減少し、地域住民が馬の魅力を認識する機会が限定的になっていることもわかりました。これは後継者減少と地続きの課題でもあります。いわば「野馬追離れ」ともいえる傾向が地域住民に見られることから、野馬追への理解を高めることと地域の伝統文化への意識を向上することという課題があるとおもいます。</p> <p>ここにまとめた四つの問題点は、2011 年以降の東日本大震災・原発事故による大幅な転出増という南相馬市の人口動態と日本全体の少子高齢化の進展という社会的背景があります。とくに南相馬市は、30 代 40 代年齢層の人口回復鈍化と若年層の人口減少が野馬追の中核的維持者層の確保と後継者育成問題に直結する</p> <p>という状況が判明し、南相馬市の課題が明確になりました。</p>
----------------	---

<p>課題解決の提言</p>	<p>課題解決のためには、以下のような取り組みが必要とされます。</p> <p>第一に、地域住民の意識を高めるために、馬文化の継承に取り組むことを提言します。野馬追は、武家社会の軍事訓練あるいは「地域の安寧と繁栄」を願う神事という歴史的文化的伝統を受け継いでいますが、なによりも馬なしでは成り立たない馬の祭礼であることを忘れてはならないとおもいます。この祭礼が継承されていくためには、南相馬が馬文化を育ててきた歴史を再確認し、馬文化を継承していく基盤をさらに豊かに醸成していく努力が必要ではないでしょうか。</p> <p>現在の南相馬では、震災・原発事故の影響あるいは生活環境の変化により個人で馬を飼育することは容易ではありません。しかし、たとえ馬を所有していなくても身近に馬に触れるような環境を作りだし、馬に親しめるような取り組みを提言します。たとえば、学校で野馬追に関わる授業を取り入れる、馬に触れ馬文化を理解する機会を地域の施設を使って設ける、など地域に根差した活動を増やすことが必要だと考えます。</p> <p>南相馬市において馬文化を広めるためのモデルケースとして、北郷騎馬会の伝統的な取り組みである少年騎馬隊と、NPO 法人相馬救援隊の取り組みを挙げることができます。少年騎馬隊は、北郷が独自におこなっているもので、鹿島の子どもたちは幼少期に騎馬武者の体験をできるそうですが、その経験は馬を身近にし、馬への理解を深めるとおもいます。</p> <p>一方、NPO 法人相馬救援隊は、引退した競走馬を引き取り、市内で乗馬やホースセラピー等の体験を提供しています。馬事公苑で馬のふれあい体験などもおこなっており、「南相馬で馬と関われる場」という役割を果たし、観光客が訪れたり、地域の子供向けのイベントをおこなったりと、馬を身近にするための団体として機能しています。</p> <p>このような団体が増えれば、たとえば秋田県における「秋田犬ふれあいマップ」(参考 <a href="http://www.saveakita.or.jp/map/">http://www.saveakita.or.jp/map/</a>) のように、南相馬のどこに行けば馬に会えるのか一目でわかる仕組み作りが可能になり、馬文化が継承される土壌となるでしょう。結果として野馬追後継者候補を増やし、地域住民と野馬追をつなぐきっかけとなり、ひいては馬文化を豊かに育む基盤づくりになるだろうとおもいます。</p> <p>また、在来馬の生息する地域では地元の子どもたちがクラブ活動で乗馬や飼育をできるような工夫をしている前例があります。野馬追のために馬を飼うには一頭当たり年間で30万円ほどはかかると伺いましたが、馬を所有することの負担は相当大きいとおもいます。相馬救援隊のような馬とのふれあいをよりオープンにし、野馬追を理解し、興味を持つ人の裾野を広げる努力を続けるべきであると提言します。</p> <p>第二に、野馬追についてオープンな話し合いの機会を増やすことを提言します。</p> <p>先述の野馬追に関わる四つの組織は、今後も野馬追を発展させていきたいという想いを共有していることは間違いないでしょう。しかし組織内や組織同士で連携して話し合う場が十分に形成されていないように感じられました。とくに五郷の各騎馬会はそれぞれ独立しており、後継者育成や参加募集での連携はあまりないように見受けられました。各組織内外で将来的な展開について話し合いを重ね、さらなる協力体制を構築していくというコミュニケーションの場の形成が急務だと考えます。</p> <p>その際、野馬追に関係する者だけに閉じた議論にとどまらない、野馬追を地域の人びと全体に広げていく活動も欠かせないと考えます。相馬の祭礼とはいえ、祭りに関与しない地元の人と参加者の温度差が感じられます。ここで重要になるのが野馬追には直接参加はしない、野馬追出場者を背後で支える女性や家族の存在だとおもいます。野馬追には野馬追参加者のネットワークのみならず、参加者の三倍から五倍を占める家族や女性のネットワークが存在しており、その影響は想像以上</p>
----------------	--

に大きいことがわかりました。現在の野馬追はそのような家族や女性のサポートなしには開催できない規模になっているとおもいます。

そこで、男性中心に野馬追に参加する人のみを増やそうとするのではなく、子どもや女性たち幅広い年代、性別に対してアピールし、野馬追ファンを増やし、地域のネットワークを広げていくことで、おのずと野馬追がほんとうの意味で地域に根差した持続可能な祭礼になるのではないかと考えます。

また、祭礼を通じた地域のまちおこし・まちづくりの観点も見据えるためにも、外に開いた議論も必要であると考えます。

第三に、南相馬市の“人口”を増やすこと、つまり南相馬地域における定住人口だけではなく、関係人口を増やすことを提案します。

震災後、原子力発電に代わる新たな産業としてロボットテストフィールドが設置され、ロボット工学関連の企業が誘致されましたが、今後さらに企業を誘致することにより、転入する人の数が増えることが予想されます。しかし、南相馬に居住する転入人口だけではなく、「観光以上移住未滿」と評される関係人口の増加も検討すべきとおもいます。

野馬追は定住人口によって支えられるだけでなく関係人口によっても支持され、南相馬市域を超えた多様な関係者が重要なサポート機能をはたす可能性をもっています。関係人口の増大をめざすためには、野馬追の魅力を積極的に発信することが重要であるとおもいます。野馬追の理解を進め、参加を促し、野馬追との関わりをつくる取り組みは、馬文化の醸成へつながるだけではなく、関係人口にも支えられた地域コミュニティの強化にもつながるのではないかとおもいます。

以上のような提言は、相馬野馬追という伝統的祭礼が高い文化的求心力をもつこと、地域への愛着形成の基盤づくりに資することを期待できるという、今回の調査であきらかになった野馬追のもつ力にもとづいています。地域への愛着形成は、地元住民のみならず地元出身の市外在住者にとっても、アイデンティティの拠り所を確かにし精神的支柱を提供する役割を果たすと考えます。相馬野馬追が歴史の変遷のなかでいかに地域のシンボルとなってきたかその経緯を知ることによって、これまで野馬追が地域の困難を乗り越えて維持存続されてきたこと、そして伝統的祭礼が蓄えてきたレジリエンスという困難を乗り越える力を内包していることを理解できました。

相馬野馬追は、地域を支える次世代の育成にとっても、さらに地域理解の促進と文化的環境生成にとっても重要な役割を果たしうる祭礼であるという認識を広めていくことが肝要であるとおもいます。

### 3 添付書類（内容が分かるもの）